

# めのうに命を宿す

めのう原石を200〜300℃で加熱すると、含有する鉄分が酸化して赤く発色する。美しいグラデーションを描いた石に命を吹き込むのが、めのう細工職人だ。

## 若狭で生まれ育った めのう細工の技法

鉄矢を小槌で叩き、赤く美しい鉱物を削っていく。おおよその形になった後、粗さの異なる砂を絶えずかけながら、ロクロに付けた鉄ゴマと木ゴマで削り、磨いていく。滑らかな質感、美しい光沢と引き換えに、原石に石墨で描き込んだ下絵は消えてしまう。ここからは、頭に思い描いた完成イメージと、かつて何度も指でなぞった師匠の作品の触感のみが頼りになる。受け継いだ技術と思いを胸に、若狭めのう細工職人は指先を動かしていく。

若狭めのう細工の発祥は奈良時代。鰐族と呼ばれる渡来人が、若狭彦・若狭姫神社建立の際に玉を作り、奉納した歴史が始まりと伝えられている。技術が進歩したのは江戸中期。享保年間を生きた高山喜兵衛は、浪花で金剛砂を使用した研磨技法を学び、津軽でめのう石の焼き入れ技法を習得。故郷である遠敷村（現在の小浜市遠敷）に持ち帰った。めのう細工は

地域の特産品となり、「若狭玉」や「遠敷玉」と呼ばれ、緒締めの玉やかんざし玉となって都で広く売られるようになった。明治期に入ると、用具の機械化・動力化が進むとともに彫刻技法が考案され、香炉や杯、仏像、動物などの置物が作られるようになった。美術工芸品として高い地位を確立した若狭めのう細工は、昭和51年に国指定伝統的工芸品となる。最盛期は約50人の職人が若狭でめのう細工業に従事していたものの、現在はわずか二人のみ。そのうちの一人が、上西宗一郎さんである。

## 師の技術と意思を受け継ぎ 作品を生み続ける若狭職人

小学6年生のときから、祖父の生家で暮らしてきた上西さん。就職一度は地元を離れたものの、父親の死をきっかけに帰郷する。「御食国若狭おばま食文化館」内にある「若狭工房」で、体験コーナーのインストラクターとして働き始めた。そこで知り



明治中期から北海道産の良質な原石を使用していたが、次第に枯渇し、現在はほぼすべてブラジル産となっている。丁寧に焼入れして発色させ、心を込めて指先を動かしていけば、このような美しく輝く作品が完成する

合ったのが、若狭めのう細工職人の高島純一さんと、後に師事する伝統工芸士・田中染吉さん。仕事を通してさまざまな技術を教わるうち、その魅力にのめりこんでいった。

平成22年から自宅に工房を構える。普段の作業時間はおよそ9時から18時まで。一つの工程を何日もかけて取り組む日もあれば、納期に合わせて複数の工程を並行する日もある。「めのう細工はとにかく根気が必要。特に、磨き工程はとても手間がかかります。昔の職人さんは、自分の作品の磨きを弟子にやらせていたと聞きます。弟子はそうやって師匠の作品の形を覚えていったんでしょうね」と上西さん。



若狭めのう細工の工程は、原石の検石から始まり、大切り(カット)、野晒し(自然酸化)、焼入れ(酸化)と続く。上西さんの工房には焼入れ設備がない(今後、導入予定)ため、焼入れた原石の加工から始めることが多い



### 小切り

焼入れた原石の色や模様から使用部分を定め、余分な部分を切断する



### 欠込み

石を膝や足で支え、鉄矢をあてがい、その頭を小槌で叩いて削っていく



### 削り

ロクロという細工機に鉄ゴマを付け、水を含ませた金剛砂をかけながら削っていく



### 磨き

細かいすり砂や磨き粉をかけながら、木ゴマで磨き、表面を滑らかにしていく



### 完成

一見、ガラス細工にも見えるが、ずしりと重い。焼入れの度合いによって、異なる色味の作品に仕上げることも可能だ

## information

### 宗助工房

小浜市西勢58-19  
TEL 0770-52-5448  
sосуけ@agate.plala.or.jp  
※工房見学は要事前連絡



自分はまだ修業する立場。昔の職人さんの作品を触って学ぶことはたくさんあります。作れば作るほど石の魅力がわかり、好きになっていきます。もっとたくさんさんの作品を生み出していきたいですね。



若狭めのう細工職人

## 上西 宗一郎さん

若狭地方が貴石細工のルーツだと世に伝えるべく、日々多くの作品を生み出し続けている。また、若狭地方で活動する作家たちとともに「若狭の空と海とものづくり」というNPO法人を設立予定だ